

週日の説教

金 大烈 神父 2011年2月11日(金)

《良い死を迎えるためには、良く生きること》

主の平和

説教に入る前に聖書の常識について申し上げます。今日読まれた第1朗読は創世記(3・1-8)ですね。訳が違っているところがあります。蛇は女に敬語を使っていません。『神は言われたのか。』と言い、逆に女は蛇に敬語を使って『神様はおっしゃいました。』と言っています。神様が全ての生き物を作って人間に治めるように指示したわけですから、エデンの園の中で、蛇はすでに人間の支配下にあるはず。このように蛇がアダムとイブに敬語を使わないで、何故人間が敬語を使っているのかと思います。もちろんヘブライ語には敬語はないのでしょう。しかし、このような訳はちょっと違うことを分かっていたいただきたいのです。

さあ、創世記の内容に入りましょう。蛇が女を誘惑しますよね。そして女がその木を見ると、どんな様子だったのですか。“いかにもおいしそうで”。これがポイントです。もしおいしそうでなかったなら、その果物を取ろうと思う気持ちにならないでしょう。ここにひとつの真理が隠れています。誘惑は大体が「おいしい」のです。「甘い」のです。ですから流されます。よく振り返ってみましょう。皆様は今「ああ、これは負けた」と思う誘惑は「甘かった」ではありませんか。「おいしかった」ではありませんか。ですからわざわざ、“いかにもおいしそうで”という表現をこの中に入れたわけです。

私達が誘惑に負けずに頑張ろうと思えば、まず「甘かったら」、これは大体が誘惑だと思わなければなりません。しかし、そのように思わないのが私達の弱さだと思います。「甘くても」これは私にとって本当にいいものか、悪いものかと、識別する心の働きが必要ではないかと思います。

さあ、私がお葬式でいつも使う言葉があります。「良い死を迎えるためには、良い生き方をする」。今までお葬式の話はあまりしなかったのですが、今日皆様と少し分かち合いたいと思います。「良く死ぬ」とはどういうことでしょうか。痛みなしに死ぬことですか。死んだら沢山の人が悲しんでくれることですか。子孫に多くの財産を残して逝くのが良く死ぬことでしょうか。「良い死」とは何でしょうか。これは哲学的な用語で実存的な質問です。

私はこのように考えています。人間が恐れる色々な事があるのですが、結局一番の恐れは「死」ではないかと思います。何故恐れるのか。比較的に言えることは、死んでからの世界を経験した人がいないからです。ですから大抵私達は、信仰的には、「ああ、あの人は天国へいかれたのでしょうか。」と信じていますが、自分のことは「私は死んだらどうなるのか」と全く分からない世界です。そしてもうひとつ、今まで教えてもらったのは「きれいな心で、やさしい振る舞いを行って来たなら天国へ入れる。そうでなかったら地獄へ落ちる。」ということです。自分を振り返って天国へ入れると自信のある人は殆どいないでしょう。もし、明日私が神様に呼び掛けられたら、私の今までの人生どうだった

かと、不安になると思います。良い死とは結局その恐れを減らすことです。ですから良く死ぬためにはよく生きる方法しかないという意味がそこにあります。私達が毎日最善をつくして、自分に与えられたことを一生懸命にやり、やさしい気持を持って施しを行い、後悔しないように頑張ってみると、やはり恐れる要素が少なくなって来ると思います。「まあ、自分なりに頑張ってきた、死んでからの世界は分からないけれども私は頑張った。信じて来たことを、そのとおりにやろう。」とそういう気持ちになるために頑張らしましょう。

私は今朝、早く起きてコーヒー飲みながらふと「もし、今日死んだら私はどうなるのか」と考えてみました。色々心に浮かぶものがありましたが、結局結論は「まあ、頑張ろう」という思いに至りました。

皆様、人間的に説明しても「死」は決して悪いものではありません。「死」を考えなければ私達は信仰的にも、人格的にも絶対成長出来ません。いつも、いつか神様の所へ行かなければならないという思いによって、今日も健康な刺激を受けるのです。ですから良い死を迎えるためには一生懸命に動かなければなりません。出来るだけ優しい心で、出来るだけ平安な心で、出来るだけ神様の御旨に叶う心をもって、そしてそれを実践しようとする心が何よりも必要ではないかと思います。もし今日神様に呼び掛けられたら、私も怖いですが、しかし、その怖さを乗り越える勇気は、綺麗に生きる方法しかないことをもう一度考えてみましょう。

ありがとうございました。